

論文要旨

【目的】産褥期の女性に起こる異常で、育児や女性の QOL に多大な影響を与えるものとして産後尿閉がある。本研究は、産後尿閉の頻度とリスクファクターを探索し、産後尿閉となった女性の妊娠、分娩の経過、産後に行われたケア及び治療、精神的な状況や授乳などを含めた生活状況を記述することを目的とする。

【方法】ケースコントロール研究にて、経膈分娩後に尿閉となった女性をケース群、尿閉とならなかった女性をコントロール群とし、ケース群女性 1 人に対して 5 人のコントロール群を年齢 10 歳幅および初産・経産にて個々にマッチングし抽出した。産後尿閉のリスクファクターを探索するために条件付きロジスティック回帰分析を行った。ケース群については、女性の産後の生活状況等について質的なデータ分析を行った。

【結果】研究協力施設 2 施設より、ケース群 77 名、コントロール群 385 名の合計 462 名を抽出した。施設 A、施設 B の経膈分娩の総分娩者数 6413 名中、産後尿閉となった女性 77 名であったことから、経膈分娩後の産後尿閉の頻度は 1.2% であった。条件付きロジスティック回帰分析を行った結果、調整済みオッズ比は、麻酔分娩 4.72 (95% CI [2.38, 9.39])、会陰切開 2.68 [1.40, 5.13]、分娩第 2 期の所要時間 1.85 [0.98, 3.49]、陣痛促進剤使用 1.78 [0.90, 3.51]、器械分娩 0.96 [0.43, 2.17]、クリステレル胎児圧出法 0.93 [0.37, 2.37] であった。産後尿閉になった女性は、半数以上が 72 時間以内に治癒していたが、産後 5 日を超えても治癒しない女性が 15.6% いた。産後 1 ヶ月を超えても治癒していない例もあり、薬物療法、自己導尿を行っていた。産後尿閉となった女性の精神的な状況より、〔導尿自体の苦痛〕、〔なぜこうなってしまったのかという思い〕、〔子どもに対する申し訳なさ〕、〔導尿と育児行動の時間のバランスがうまくとれないことへのストレス〕、〔先行きが見えない不安〕、〔自己導尿指導に対する苛立ちと不信感〕の 6 つのカテゴリーに分類することができた。

【結論】本研究における経膈分娩後の産後尿閉の頻度は 1.2% であり、麻酔分娩と会陰切開がリスク因子であることがわかった。また、産後尿閉となった女性の 92.2% が初産婦であり、慣れない育児の中、思うように育児ができないストレス、今後に対する不安を抱えていた。今後、周産期において産後尿閉の予防や管理に向けた取り組みが必須である。